

二〇一六年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇一六年 二月四日実施

国語

三次

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

子供のころ「人間万事塞翁が馬」という故事成語を初めて教えられたとき、なんだかできすぎた話だなあと感じたものです。馬が逃げてしまったと思ったら、立派な馬を連れて帰ってくる。駿馬に息子が乗っていたら落馬して足を折ってしまう。しかし、そのため息子は隣国とのあいだで起きた戦争に行かずにすみ、命が助かった——なんて、①いかにもつくり話っぽい。昔の中国の偉い人が、安易に喜んだり悲しんだりすべきではないとお説教するためにつくったんだろうなどと、生意気にも考えていました。

ところが歳を重ねるにつれ、ああ、まさしくそのとおりなのだとということが、だんだんと腑に落ちてきたのです。

私の子供時代は、日本が軍国主義の方向へとひた走っていた時代と重なります。三歳のときに満州事変が勃発し、小学校二年生のときには軍部の主導のもと中国への侵略がはじまりました。そして、小学六年生のとき太平洋戦争開戦。緒戦の勝利に国民が浮かれているうちに、日本はアメリカの物量作戦に押され敗戦へと追い込まれていきました。ついには広島と長崎に原爆を落とされ、多くの国民が虐殺されます。

陸軍幼年学校に進むほどの軍国少年だった私は、それをたいへんな不幸だと思いました。国民の大多数も、戦争が終わったことに安堵はしたものの、敗戦自体は不幸だと感じていた。② a、今振り返ると、あの巨大な不幸が私たちに幸福をもたらしたことがわかります。もし戦争に勝っていたら、日本人は国の武力を誇り、傲慢で嫌な国になっただけでしょう。

敗戦という苦しみと屈辱を受けたために戦争の愚かさに気づき、平和を重んじる国になれたのです。戦争放棄を定めた憲法第九条は、不幸のどん底に突き落とされた国民の願いの結晶でした。新憲法をつくるにあたりアメリカ側からの働きかけがあったとはいえ、後世に残る名文で書いたのは日本人です。基本的人権や婦人参政権なども、日本が勝ち続けていたら実現が遅れていたでしょう。

太平洋戦争によって、日本だけでも三百万人以上の命が失われました。それら多数の死者からの贈り物が平和憲法であり、私たちはその恩恵によって平和を享受している。b、その平和を背景に経済的復興を遂げることもできたわけです。

日本という国家の話をしてきましたが、一人ひとりの人生においても同じことが言える。自分は幸福だと思っていた人が

突然の不幸に見舞われることもあれば、不幸を嘆いていた人が幸福になることもある。かと思えば、またそれが逆に転じていく……。そんな禍福のありようを、これまでに幾度となく目撃し、自分自身味わつてもきました。

c、禍福が縄のようにより合わされているのが人生。幸福も不幸も一生をとおして持続するものではありません。だから、^③あまり急いで事を決しないほうがいい。自分は不幸な人間などと決めつけ自殺でもしようものなら、これから巡つてくる幸せを味わえなくなつてしまつてはいませんか。

禍福の変転には人の力の及ばない部分もありますが、その一方で、^④本人の心のもちようがその後の人生に大きく関わつてくることも多々ある。とくに、不幸が幸福に転じていく場合はそうなのではないでしょうか。

d、いじめられたとき、挫折したとき、私たちの心にはさまざまな思いが渦巻きます。悲しみ、怒り、悔しさ、憎しみ、妬み……。自信を失い、自分がなんの取り柄もない駄目人間に思えて自己嫌悪にかられたりもするでしょう。それは当然のことなのですが、いつまでもマイナス感情にとらわれていては、なかなか不幸から抜け出せない。

しかし、今のつらさをこれからの人生で生かそうと未来志向で生きはじめた途端、不幸は不幸ではなくなります。それどころか、幸福を見いだすための貴重な財産になる。

^⑤いじめをバネに何くそつと発奮し大成する人が、世の中にはたくさんいます。自分がつらい目に遭つたからこそ、他者の痛みを思いやれるようになる。

また、失敗や挫折は自分というものをよく知る機会でもあります。小さな失敗を重ねることで自分の能力や適性が見えてくるものですし、そこでくじけさえしなければ自分の信念を貫く力が育つ。その後の人生でさらに大きな不幸に見舞われたとき、たわみはしてもそう簡単には折れない竹のような、しなやかな強さも養われていくでしょう。

人間の体が異物を排除する免疫機能には、生まれながらに備わった「自然免疫」と、同じ異物が二度目に進入してきたとき前回より素早く反応する「獲得免疫」とがあります。心も体と同じで、痛い目に遭うことで免疫力がパワーアップする。

^⑥苦しみというヤスリによつてしか磨かれないものがあるのです。

幸福という糸だけで織られた人生など存在しません。長い人生、誰もがどこかで必ず、つらいこと、思うようにならないことに遭遇します。ずっと順風満帆できた人がある程度の年齢になつて挫折すると、ちよつとしたことで大きなダメージを

受けてしまう。

その点、子供時代に挫折体験を乗り越えてきた人は、つまずいたとき上手に転ぶことができます。[e]足の骨を折ったとしても、首の骨まで折ることはありません。そういう意味では、いじめや挫折、とくに若いうちの苦しみは幸福になるための要件だと言っても過言ではないでしょう。

だから、若い人たちには⑦失敗を怖れず挑戦してほしい。傷つくことを怖れず人と深く関わり、希望をもって世界を広げていってほしい。辞書では、成功の反意語は失敗ということになっていますが、実際の人生においては「チャレンジしないこと」なのです。

傷つくことを怖れて自分の殻のなかに閉じこもっていると、ますます傷つくのが怖くなってしまいます。しかし勇気を出して殻を破り、何度か失敗したり傷ついたりしているうちに、なんだ意外と平気じゃないかと思えてくる。そのときはつらくても、苦しみはやがて薄れていくこと、心というものがけっこうタフであること、マイナスだと思った体験が心を鍛え、その後の人生でプラスに作用していくこともわかってくるはずです。

もう一つ言えるのは、⑧好きなことがある人は強いということ。『キュリアス・マインド』という本を読んで、あらためてそう思いました。第一線で活躍する二十七人の科学者が、それぞれにどのような経緯で今の道を歩むようになったのかを振り返ってつづったエッセイ集です。

クラスメートからのいじめなどが原因で人間不信になり、対人恐怖や被害妄想に苦しんでいた少年が、電子工学に興味をもって電子楽器を演奏したり、古いテレビから映写機をつくったりしながら、ヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）開発の第一人者となっていく。子供のころクラス全員から仲間外れにされ、大人になってからは遺伝性の自己免疫疾患でほとんど寝たきりになってしまったアメリカ人女性が、心理学の面白さに目覚めてベッドのなかで研究を続け、子供の人格形成に關する新説で世界的に評価される……。

彼らのように、好きなことが仕事に結びつかなくてもいいのです。得意なことである必要も、人から評価されるようなものである必要もありません。やっていて自分が楽しい何か、自分を喜ばせてくれるものであれば、どんなことでもいい。

好きなことがなかなか見つからないという人は、好きなことと得意なことを混同し、それがどう評価されるかにこだわり

すぎているのかもしれない。それによつてほめられたいとか、下手だから恥ずかしいとか、こんな趣味は馬鹿にされるといった気持ちを持ったん横に置いて、素直に自分の心と向き合つてみれば、誰でも必ず「好き」が見つかるはずです。

そうして見つけた「好き」は、比較や競争や評価とは次元の違うところにある。だからこそ、子供にとつても大人や老人にとつても生きていく支えになるのです。単に「今、ここ」がたらくてたまらないときの逃げ場になるだけでなく、人生をより豊かにし、その人を幸福へと導く原動力となつていきます。

先ほど、いじめは決してなくならないものなのだから心の免疫力を上げていくことが大切だと述べました。免疫力アップに最も効果的なのは、自分にとつての「好き」を見つけること。子供の幸せを願うなら、親や教師はまず何よりも、子供たち一人ひとりが好きなことを見つけて伸ばしていけるような教育をすべきでしょう。そして、それがひいては、⑨ いじめを減らすことにもつながっていく。

人間には残念ながら、自分より下の存在をつくることで不安や焦りを解消する性向があります。自分に自信がなく、人と自分を比べて心のなかで優劣をつけている人ほど、いじめという行為に走つてしまう。しかし、他者との比較や競争、他者からの評価と無関係な「好き」を見つければ、それを核にして少しずつ他者を気にすることから解放放たれていきます。「自分は自分」と思えるようになり、健全な自尊心が育つていくのです。

(加賀 乙彦『不幸な国の幸福論』 集英社)

問一 文中の a へ e に当てはまる語として、最も適当なものを次のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ そして ウ たとえ

エ たとえば オ なぜなら カ まさに

問二——線部①「いかにもつくり話っぽい」とありますが、どういふところが「つくり話っぽい」のですか。最も適當なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 現実では起こりえない幸や不幸が、何度もおとずれるところ。

イ 幸が不幸に、不幸が幸につながっていくところ。

ウ 誰もが経験するような幸と不幸が語られるところ。

エ 一人の身に、幸と不幸が次々と重なって起こるところ。

オ 不幸な出来事も前向きに受け止めようとするとするところ。

問三——線部②「あの巨大な不幸が私たちに幸福をもたらした」とありますが、「不幸」と「幸福」はどのようなことを指しますか。「不幸」については一つ、「幸福」については二つ答えなさい。

問四——線部③「あまり急いで事を決しないほうがいい」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問五——線部④「本人の心のもちよう」とありますが、不幸が幸福に転じていく場合の「心のもちよう」とはどのようなものですか。二十五字以内で答えなさい。

問六——線部⑤「いじめをバネに何くそつと発奮し大成する人が、世の中にはたくさんいます」とありますが、そのような人が大成するのはなぜですか。適當なものを次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 幸福だと思っていた人が不幸になったり、不幸だと思っていた人が幸福になったりすることがあるから。

イ 失敗や挫折を経験することで、自分の能力や適性が見えるようになるから。

ウ 小さな不幸を経験することで、「自然免疫」の上に「獲得免疫」を体が備えるようになるから。

エ つらい目に遭ったからこそ、他者を思いやれるようになっていくから。

オ 人が発奮すると、それまで以上に力を発揮できるものだから。

カ 不幸な体験をした人には、幸がめぐってくるものだから。

問七——線部⑥「苦しみというヤスリによってしか磨かれないもの」とありますが、それはどのようなものですか。本文中から九字で抜き出して答えなさい。

問八 — 線部⑦ 「失敗を怖れず挑戦してほしい」とありますが、筆者が「失敗を怖れず」に挑戦してもらいたいと考えているのはなぜですか。説明しなさい。

問九 — 線部⑧ 「好きなことがある人は強い」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問十 — 線部⑨ 「いじめを減らすことにもつながっていく」とありますが、好きなことを見つけて伸ばしていけるような教育をすることが、いじめを減らすことにつながるっていくのはなぜですか。説明しなさい。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

「しーちゃん」は勉強もできず、やることなすこと間が抜けていたが、「私」はその「しーちゃん」となぜか気が合った。小学校四年生の冬休みのある日、「しーちゃん」の切実な願いを実現するため、二人は、「私」の祖母から聞いた「どんな願いでも一回だけ絶対に叶えてくれる」神社、「いっぺんさん」に自転車で行くことにした。しかし、山を二つ越えた村にある「いっぺんさん」までは、とんでもなく大変な道のりだった。

途中、小さな屋根のあるバス停のベンチに腰を下ろして、私たちは家から持ってきたお弁当を食べた。その路線はとつくに廃止されていて、バス停の看板は錆にまみれ、何という名前の停留所なのかさえわからなかった。

「外で食べると、何でもうまいなあ」

そう言いながらしーちゃんは、アルミの弁当箱にご飯を詰め、海苔を敷いて醤油をかけただけのお弁当を食べていた。夜遅くまで働いている母親を起こすのが悪くて、自分で作ったのだと言っていた。

「ところでさあ……俺は白バイのお巡りさんになれますようにって頼むつもりだけど、うっちは、どんなことを頼むんだい」

とりあえずは野球選手になれますようにと頼むつもりだったが、実はまだ、はつきりとは決めていなかった。①ウルトラマンになれるように頼んだら、どうなるかな……などと考えてさえた。実際、その時の私には、はつきりとした夢も希望もなかったのだ。

私が②言葉濁すと、しーちゃんはどこか悲しげな目で言った。

「いいなあ、うっちは……実は俺、本当はもう一つ、お願いしたいことがあるんだ」

「ちえっ、欲張りだな。どんなお願いだい？」

「教えてもいいけど、笑わないか？」

私がうなずくと、しーちゃんは照れ臭そうに呟いた。

「俺、早く大人になりたいんだ」

「何で？」

「ほら、大人になったら、父ちゃんが暴れても、母ちゃんや弟たちを守つてやれるだろう？ だから、早く大人になりた
い」

変な願い事だつたら思い切り笑つてやろうと準備していた私は、口をつぐむしかなかった。彼はきつと、ごく当たり前に
生きている私なんかより、子供の無力をずっとずっと深く噛みしめていたに違いない。

母に作つてもらつたお弁当をじつと眺めながら、私は考えた。

「じゃあさ、その二つを一緒にしちゃうっていうのはどうだ？ 早く大人になって、白バイのお巡りさんになりたいて頼
むんだよ。それだつたら、ちゃんと一つじゃないか」

「なるほど！ うっちゃん、頭いい！」

その時のしーちゃんの輝いた顔は、今でも忘れることができない。

……中略……

遠くの道を、一人の老人が歩いていることに気づいたのは、ちょうどそんな時だ。私たちは顔を見合わせてうなずくと、
その老人の元に急いで自転車走らせた。

「おう、子供を見るなんて久しぶりだなあ」

老人は私たちを見ると、皺だらけの顔をいつそうくしゃくしゃにして微笑んだ。

「何せ、ここにはもう年寄りしかおらんからな」

今から思えば、その老人は奇妙な格好をしていた。遠目には大きなどてらを着ているように見えたのだが、よく見ると薄
汚れた掛け布団を、そのままマントのように羽織っていたのだ。その頃にはそんな言葉はなかったが、いわゆるホームレス
のようにも見えた。

老人の異様に黙り込んでいる私をちらりと見て、しーちゃんはいっぺんさんの場所を尋ねた。

「お前ら、いっぺんさんにお参りに来たのか。遠いところからご苦労だったなあ」

いかにも懐かしい言葉を聞いたという風に、老人は何度もうなずいた。

「でも今は、あそこはもうダメだ。残念だったなあ」

「え、どうしてですか」

それまでしーちゃんに会話を任せていた私は、^③ 思わず口を挟んだ。

「何でって、ほーれ、ここにはもう、拝む人間がいねえだろうが。拝まれない神様にゃあ、何の力もねえんだよう」

そう言うとき老人は、^④ 何がそんなに嬉しいのか、子供のよう^うに声を出して笑った。

私には、その老人が不気味なものに感じられて仕方なかった。ちよつとばかり、頭のネジが緩んでいるのかもしれない
……と思った。

「まあ、でも、せっかく遠いところから、きつい思いをして来たんだ。拝むだけ拝んでけばええ。わしについて来いや」
私としーちゃんは心中怖いものを感じながら、老人の後を自転車を押してついていった。

「お前ら、どう聞いてきたかは知らんけど、ちゃんとお願いのやり方、知つとるんかあ？」

道すがら、老人は何度も振り返りながら言った。私たちと話すのが楽しくてたまらないように、皺くちな笑みを絶やさ
なかった。

「ボンボンと手え打つてお願いします……だけじゃ、あかんだぞ。石を持って行かんとな」

「石？」

「そうだ。まずな、祠ほしらに着いたら、いつペンさんにお参りするんじやが、そんな時にな、自分の願かない事を叶えてくださいって頼むんだ。どんな願ねがい事かは、そんな時は言わんでええ。その後、祠ほのそばをな、どこでもええから掘り起こすんだ。いつペンさんがお前らの願ねがいを聞いてくれるんなら、白くてきれいな石がきつと見つかる。それを家を持って帰って、誰だれにも見せねえように袋ふくろに入れて、ずっと持つてる。それで毎日、その石が神様だと思つて、自分の望みをお願いするんだ。そしたらいつか、必ず叶うから……ただし、いつペンだけなあ」

その話を聞いて、私は少しがっかりした。いつペンさんなんて、いかにもな名前なのだから、一度お願いするだけで何でも願ねがいが叶えられるのかと思つていたのだ。案外手間がかかる。

「おじいさん、もし、石が見つからなかったらどうするの？」

^⑤ 少し興きざめな気分になった私とは違つて、しーちゃんはむしろ、その手間に真実味を感じたようだった。

「それは、まあ、今はまだ縁がなかつたちゆうことだなあ」

そうやって⑥老人は、どこか底意地の悪そうな目で私を見て笑った。

やがて私たちは、山の斜面に接した茶色い森の前に来た。

「ほれ、そこに細っこい道があるだろうが。そこをまっすぐに行けば、ちつちえ祠があつから。ま、道もほとんど消えかけてつから、氣をつけてなあ」

そう言いながら、老人は森の道を指さした。とても自転車では入れないような、細い小さな道だった。

私たちは老人に礼を言うと、そこに自転車を置いて森の道に入ろうとした。その時、ふと思いついたように、老人がしーちゃんを呼びとめた。

「お前、いっぺん医者に見てもろうた方が、ええぞお」

しーちゃんはぼかんと口を開けて老人を見ていたが、やがて、ハイと答えた。その老人の奇妙さに、ようやく気づいたような顔をしていた。

私たちは森の中の道を、一列になって歩いた。かなり深い森で、太陽の光があまり届かず、ひどく陰気な感じがした。うかつな方向に進んだら、そのまま遭難してしまいそうだった。

「うっちゃん、祠って、あれじゃないの？」

私がいぶん心細くなり始めた頃、先を歩いていたしーちゃんが言った。彼が指さす方向を見ると、森の中にポツリと、その祠はあつたのだった。

その日の夜、私は父親から、顔が曲がつてしまうのではないかと思えるほど殴られた。

家に帰り着いたのが、九時を回ってしまったからだ。だが、私はあくまでも平手で頬を張られたのだから、まだいい。翌日に会つたしーちゃんは、右目のすぐ下が、まるで蜂に刺されたように腫れ上がっていた。お父さんに拳で殴られたからだ。「すごい騒ぎになっちゃったからな」

騒ぎにしたのは、私の親だった。私たちの帰りがあまりに遅いので、釣りに行った川で何かあつたのではないかと慌てふためき、学校の先生はもちろん、警察にまで連絡してしまつたのだ。私の家の前に帰り着いた時は、とんでもない騒ぎにな

っていた。私の両親としーちゃんのお母さん、担任の先生がずらりと並んで、警官と話をしていた。さらに近所の人たちが加わり、まさしく川の捜索に向かおうとしているところだった。

そこにこのご帰って来たのだから、無事に済むはずがない。私としーちゃんは、それぞれの親にさんざん引っぱたかれた。他人を巻き込んでしまった以上、親としては、その人たちの前でそうする以外にはなかったのだ。

私たちはあくまでも、帰りに道に迷ったと言ひ張ることで、大人たちの追及を逃れた。⑦ いっぺんさんに行ったことだけは、絶対に話してはならなかった。

けれど、私たちは満足だった。自分たちの力で、思いがけないことをやってのけた……という充足感があった。

「ありがとう、本当にうっちゃんのおかげだよ。さっそく昨日の夜から、お願いを始めたよ。早く大人になって、白バイのお巡りさんになりたいって」

翌日、改めて校長先生直々に お目玉をくらった帰り道、しーちゃんは折れた前歯をむき出して笑った。

「でも、ごめんな、俺ばかり」

「いいんだって。もともと、しーちゃんのために行ったんだから」

私たちは祠を見つけた後、奇妙な老人に言われた通りにお参りし、近くの地面を適当に掘り返した。石を人に見られてはいけないというので、念のために背中を向け合って、それぞれが好きな場所を掘った。日当たりの悪い森の土は水気を含んでいて、棒切れをシャベルがわりにすると簡単に掘れた。

「あつた！ きつとこれだ」

しーちゃんは十分もしないうちに、石を見つけた。その時の喜び方は、半端なものではなかった。森の中で意味なく飛び跳ねながら、大きな声で何度もバンザイを叫んだ。

今、その姿を思い返すと、私は少しばかり辛い気分にもなる。いつも呑気そうで、悩みなどとは無縁そうに見えた彼だったが、その実、白バイ警官になれそうにないということに、ひどく胸を痛めていたのだ。

「うっちゃんも、早く見つけるよ」

興奮した口調でしーちゃんは言った。けれど、私はなかなか見つけることができなかった。あちこち掘り返してみても、出てくるのは木の根の欠片や、ゴツゴツした茶色の石ばかりだ。

「石って、どんなのなんだよ。しーちゃん、ちよつと見せて」

「ダメだよ。人に見せちゃいけないって、あのおじいさんが言ってた。えーと、新品の消しゴムくらいの大きさで、ツルツルしてて、ハツカ飴あめみたいな感じだよ」

しーちゃんが石の様子を説明してくれたが、結局、私には見つけることができなかつた。きっと私が切実な願いを何も持っていないことを、神様はお見通しだったのだろう。

私は自分の石探しを、早々に放棄ほうきしてしまった。しーちゃんは、もつとよく探すように言っただけだけど、それほどの熱意はわかなくなつた。祠ほこらの場所はわかつたのだから、本当に望むものができた時に、また来ればいい。

「それにしても、あのおじいさんに会えてよかつたな。あの人がいなくなつたら、いっぺんさんの場所もわかんなくなつたよ」
「でも、ちよつとおかしそうだったぜ……何か、まともじゃないっていうか」

私たちは歩きながら、前日の冒険ぼうけんを反芻はんすうした。

「そういえば、あのおじいさん、しーちゃんに医者に見てもらえとか言ってたよな」

「たぶん、この歯のことじゃないの？ 母ちゃんも、よく言ってるから。このままにしてたらバイ菌きんが入って、絶対に虫歯になつちゃうって」

しーちゃんはそう言つて笑つた。

それから二ヶ月ほど経つた頃、「しーちゃん」は授業中に意識を失つて町の救急病院に運ばれ、更に隣となりの市の大きな大学病院へと移送されて、そのまま入院することになった。「しーちゃん」も「私」も、入院すればすぐに治ると信じていた。二週間ほどして「しーちゃん」から電話がかかってくる時、電話口の「しーちゃん」の声は、元氣そのものだった。

「悪いけど、うちちに頼たのみがあるんだ」

しばらくバカな話をしたあと、しーちゃんは声を潜ひそめて言つた。

「いつでもいいから、あの石、持ってきてくれないかなあ」

「石って……いっぺんさんの石のことかい？」

「うん。実はあれ、例の場所に隠してあるんだ」

「例の場所って、秘密基地？」

「そう。タンクの裏のパイプの間に、ガチャガチャのカプセルに入れて隠してあるんだ。家には、ものを隠しておける場所なんかないからさ」

しーちゃんは二間のアパートに家族五人で住んでいたから、私のように自分の机を持っていなかった。まだ小さい弟と妹がいる家に置いておくよりも、秘密基地の方が安全だと思ったのだろう。何せいっぺんさんの石は、絶対に人に見られてはいけないのだ。

「ちゃんと紙に包んであるけど、カプセルをあげないでくれよ」

「OK、まかせとけ」

私はなるべく早く、それを届けることを約束した。

実際に病院に行けたのは、それからさらに二週間ほど経ってからだったと思う。家からかなり離れていたのも、母に頼んで連れて行ってもらったのだ。母はお見舞いに、ミカンやパイナップルの缶詰を買っていった。

久しぶりに見るしーちゃんは、別人と思えるほどに痩せていた。ふっくらとしていた頬は萎んだように薄くなり、顔は骸骨のようだった。

「ありがとう、うつちん」

あの人懐っこい笑顔だけは変わらなかったが、欠けてしまった前歯が、妙に大きく見えた。

「しーちゃん、白バイのお巡りさんは別の方法を考えることにしてさ、病気が治るようにお願いしたらいいじゃないか」

初めて見るしーちゃんの衰えぶりに、私は恐怖を感じた。⑧ 自分が思っている以上に事態は深刻なのだ……ということに、

初めて気づいたのだ。

「でも、もうお願いしちゃったからなあ」

「大丈夫だよ。神様だって、わかってくれる」

「でも……」

「わかった！ じゃあ、俺がもう一度、あそこに行って、石を探してみるよ。今度はきつと見つかるから、その石で、しー

ちゃんが白バイのお巡りさんになれるようにお願いしてやる。だから、しーちゃんの石は、病気を治すために使えよ。そっちの方が絶対にいいから」

「それじゃあ、野球選手になるお願いはどうするのさ」

「そんなの、どうだっていいんだ。ホントのこと言うと、自分が野球選手になりたいのかどうかも、よくわからないんだ。大きくなって、やつぱりなりたかったら、自分で努力してなるよ」

「うっちゃん」

⑨ しーちゃんは今にも泣き出しそうな顔をした。

「だから絶対、病気が治りますようにってお願いするんだぞ」

「わかった。そうするよ」

私が差し出した掌てのひらを拳こぶしで叩たたきながら、しーちゃんはニツコリ笑った。

私はあの時の親友の笑顔を忘れない。私が最後に見た、しーちゃんの笑顔だ。

しーちゃんは、その数日後の夜、容態が急変して亡なくなった。

(朱川 湊人しめかわ みなと「いつぺんさん」『きみが見つける物語 十代のための新名作 友情編』 角川文庫)

問一 〓 線部①「言葉を濁す」・②「お目玉をくらった」の意味として最も適当なものをそれぞれ後のア～オから選び、記

号で答えなさい。

① 「言葉を濁す」

- ア ぶつぶつくり返す
イ あいまいに言う
ウ 低い声で話す
エ 小声でしゃべる
オ 変な声を出す

⑥「お目玉をくらった」

- ア 急に呼び出された
イ いやな話をされた
ウ きつく叱しかられた
エ 声を掛かけられた
オ ほめてもらった

問二——線部①「ウルトラマンになれるように頼んだら、どうなるかな……などと考えてさえた」とありますが、これはどのような「考え」だと言えますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 実現不可能な願いでも実現するのを試してみようという、真剣味けんのない考え。

イ どうせ叶えるならできるだけ大きな願いを叶えたいという、欲張けった考え。

ウ どうせ実際には願いは叶いはしないのだという、ちよつと馬鹿かにした考え。

エ 一回しか願いが叶わないのだから世の中の役に立つ結果を得たいという、切実な考え。

オ 今は叶いそうもない願いをして本当の願いは先送りにしようという、ずるい考え。

問三——線部②「しーちゃんはどこか悲しげな目で言った」とありますが、なぜ「悲しげ」なのですか。説明しなさい。

問四——線部③「思わず口を挟んだ」とありますが、「私」がこの時、そうしてしまったのはなぜですか。説明しなさい。

問五——線部④「何がそんなに嬉しいのか、子供のようにに声を出して笑った」とありますが、もしこの老人が「いつペンさ

ん”の神様だったとすると、この笑いはどのような笑いだと考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 頼たよられも頼まれもしなくなった自分のふがいなさを笑い飛ばす笑い。

イ ずいぶん長いこと見ることのなかつた子供を見て喜んでる笑い。

ウ 拌まみに来たたくせにお願いの仕方も知らない二人にあきれる笑い。

エ 遠いところからわざわざ来たのに願いが叶わない二人をあざける笑い。

オ 久し振りに自分を拌むために人が訪れてくれたことにはしゃぐ笑い。

問六——線部⑤「少し興きざめな気分になった私」とありますが、なぜそのような気分になったのですか。説明しなさい。

問七——線部⑥「老人は、どこか底意地の悪そうな目で私を見て笑った」とありますが、この様子は、「老人」のどのような思いの反映だと考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 何をどうしようと、この神社と縁のない「私」の願いは叶いはしないだろう、ということ。

イ「私」にはまだ本気で願うほどの切実な願いなどありはしないのだろう、ということ。

ウ「私」は面倒なことをやれるような真面目な性格の持ち主ではないのだろう、ということ。

エ いっぺんさんを信じる気持ちの弱い「私」の願いや叶いはしないのだ、ということ。

オ あまり態度の良くない「私」には決して石なんて見つけたりはしないのだ、ということ。

問八——線部⑦「いっぺんさんに行ったことだけは、絶対に話してはならなかった」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 親に無断で遠くまで出かけたことがばれてしまい、そのことが今のような騒ぎにつながったとなれば、大人達の怒りの火に油を注ぐことになりかねないから。

イ いっぺんさんがどういうところか知られてた皆さんの人が願いを頼みに行くことになり、他の人の願いに埋もれて「しーちゃん」の願いが叶わなくなりかねないから。

ウ いっぺんさんがどういうところであるかとか、誰から聞いて知ったのかとか、次から次へと話が広がって、いつまでも追及され続けることになりかねないから。

エ なぜわざわざそんなところまで行ったのかなどといろいろと追及され、いっぺんさんへの願いを話したり、石を見せたりすることになりかねないから。

オ 子供だけでそんな遠くにまで出かけた理由を問いただされて、「しーちゃん」が叶えたい願いのことまで大人達に話させられることになりかねないから。

問九——線部⑧「自分が思っている以上に事態は深刻なのだ」とありますが、この時より前に、このような事態となることをそれとなく示していたある人物の発言を本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問十——線部⑨「しーちゃんは今にも泣き出しそうな顔をした」とありますが、これは「しーちゃん」のどのような思いの表れですか。答えなさい。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 次回のテストではクラスで一番になるとセンゲンする。
- ② 大学では物理学をセンモンに勉強する。
- ③ 友人に誘さそわれて、絵画のテンランカイを見に行く。
- ④ 日本の夏は湿度しつどが高いのでムシ暑い。
- ⑤ 低い雲が夕れこめていて、今にも雨が降りそうだ。
- ⑥ アワやヒエなどの雑穀が混ざったご飯を食べる。
- ⑦ 不覚にも留守中に泥棒どろに入られた。
- ⑧ 迷った末に、結局間違ちがった選択肢を選んでしまった。
- ⑨ 具材を細かく刻んで料理の下ごしらえをする。
- ⑩ この取り組みを続けることで、新たな伝統を築いていきたい。

問題四

次の①～⑤の語句の使い方として最も適当なものをそれぞれ後のア～エから選び、記号で答えなさい。

① 「難なく」

- ア 茶道の先生の息子さんは、さすがに難なく風格がある。
イ 二人の意見は最後まで難なく対立したままだった。
ウ 優秀なとも子さんなら、漢字検定五級は難なく合格するだろう。
エ 私は小さいころから、難なくおとなしい子だと言われた。

② 「境地」

- ア あまりに驚いて、生きた境地がしなかった。
イ アメリカ旅行の境地を聞かせてくれよ。
ウ 忙しくて、他のことを考える境地がないんだ。
エ 厳しい修行で悟りの境地に至った。

③ 「なげやり」

- ア きまじめな彼女は、全国大会優勝という目標に向かってなげやりに進んでいる。
イ 冗談でからかったただけなのに、彼はなげやりに僕につかみかかってきた。
ウ なかなかうまくいかないからといって、なげやりになつてはいけないよ。
エ 「まだ逆転のチャンスはあるよ」と彼はなげやりな態度で私を励ました。

④ 「気前」

- ア お客さんと接する仕事は、気前が折れて疲れる。
イ 叔父は気前が良く、一番高いお寿司をおごってくれた。
ウ 今日は寒いので、外出しようという気前が起こらない。
エ この港には、江戸時代に栄えた気前がまだ残っている。

⑤ 「おずおず」

- ア 彼女はいつもおずおずとしていて、クラス全員から信頼されている。
イ せっかくここまで来たのに、おずおずとは引き下がれない。
ウ みんなに問い詰められて、彼はおずおずと話し始めた。
エ ろくに勉強しなかったのに、おずおず全問正解してしまった。

問題五

同じ漢字が使われている言葉でも、意味や読み方の異なるものがあります。(例)にならって、次の①～⑤の文中の□□に入れるのに適当な漢字を後の【漢字群】からそれぞれ選び、文を完成させなさい。

(例) この建物に色を塗るとしたら何色(なにいろ)がいいかなあ。

この入れ物の中にはクレパスが何色(なんしよく)入っていたの？

① 家族旅行の行き先については□□ 思案中だ。

礼儀正しい彼女は□□ に対しても、いつも丁寧(ていねい)に対応している。

② 市に書類を提出しに行く。

彼は□□ をわきまえた人だ。

③ 暗闇(やみ)に何かいる

人に接する時は□□ を感じた。
□□ りをすることを忘れないようにしよう。

④ この指輪は祖母が□□ にしていたものです。

この失敗をそのままにしてしまうと□□ になってしまおうぞ。

⑤ 彼女はダンスをプロ並みに□□ に踊(おど)る。

この後、舞台(ぶたい)の□□ から主役が登場します。

【漢字群】 目 耳 手 上 下 大 小 人 役 者 気 所 事 配 集